

2005年度 日本家政学会 第57回日本家政学会年次大会 若手の会パネルディスカッション

日時：2005年5月29日 13:00～14:00

場所：中村学園（福岡）

テーマ：海外で学ぶ、国内で学ぶ Part 2

話題提供者：赤塚朋子 先生（宇都宮大学）

上野颯子 先生（金城学院大学）

香西みどり先生（お茶の水女子大学）

進行：お茶の水女子大学 永田晴子先生

平成17年度（社）日本家政学会若手の会幹事（〇代表）

分野	H16・17年度幹事	H17・18年度幹事
経営	〇永田晴子（お茶の水女子大学）	佐藤裕紀子（東京福祉大学）
食物	濱西知子（共立女子大学）	村上 恵（近畿大学）
被服	前田亜紀子（長野県短期大学）	内藤章江（相山女学園大学）
住居	鈴木佐代（日本女子大学）	藤平眞紀子（奈良女子大学）

※若手の会では、本シンポジウム開催に先立ち、テーマに関するアンケート調査を行った。この結果について濱西幹事より報告がなされた（参加者には結果をまとめた資料が配布され、パワーポイントを用いて報告された）。
※本調査では一般的な留学と研修の双方を合わせて留学という言葉を使用した。

●アンケートの報告内容

- ・ 調査期間：平成17年4月23日～5月26日。
- ・ 回答者：34名（うち同一人物による留学経験複数の場合、複数回答を含めた）。
- ・ 事例数：海外留学31事例、国内留学が7事例

留学直前の年齢・身分：海外留学10代から年配まで幅広い。30～35歳が最多。国内留学40代が4名で最多。当時の身分は様々。留学動機：海外「研究を発展させる、研究方法を取得する、勉強するため、語学力向上のため」など。国内留学「研究を充実させる、勉強するため」。留学先の決め方は、海外「教授、上司、恩師、知人などの紹介、人伝、文献インターネットなどで探す」。国内「教授、恩師の紹介、母校かつ専攻分野のあるところ」。なぜ海外、なぜ国内に留学されたか：海外「研究したいテーマが海外にあった、海外の研究、研究事情を知りたい、語学の向上」。国内「研究に関して留学する」という回答であった。助成金、その他のシステムの利用：利用して留学される方が多い。海外「文部科学省の研究員制度や財団の奨学金、留学制度」、国内「文部科学省の内地研究員制度や大学内の制度」。周囲の協力状況：「おおむね協力的」が多く、中には「非協力的な場合」もあった。留学準備中大変だった事、留学前にやっておいたほうが良いこと：大変だった事「ビザの取得に関する事、留学中の授業、講義をどうするか」ということ。留学前にやっておいたほうが良い事：「語学力、特に会話力を身につける、自分の研究の目的を明確にしておく、日本での仕事は片付けておく」。留学期間と留学先：海外「1年以下が最多、2年以下、3年以下など」。国内「全て1年以下」。海外留学先「おおむね英語圏が多いが、英語圏以外ではフランス、スウェーデンなど」。留学中の宿泊先：海外「賃貸住宅」。国内「自宅から」という方もいた。家族とのコミュニケーション手段：「電話、郵便、メール」。メールは、環境が整っていない頃に留学されていた方からは、ファックスもあった。留学中、日本での所属先の仕事はあったか無かったか：あった場合「メールでやり取りをした、国内留学の場合は所属先に戻って仕事をした」。留学中に困った事：海外「言葉に関して困った、外国人との共同生活でのマナーやルール」で、その対処方法としては、「研究室の院生、教授、教員に相談した」。国内留学の場合は特に無かった。満足度：ほとんどの方が満足されているが、「留学期間が短かった、もっといたかった」という意見もあった。留学後の研究発表、報告義務、移動、勤務形態の制約：「戻ってから報告書、報告会をした」方が数件あり、その後の勤務形態は、「はっきりとは決

められてはないが、転職ができない」ということがある。留学後の研究、教育の効果：海外「研究の幅が広がった、国際研究や海外共同研究者を得られた、英語論文の執筆などができるようになった」。国内留学の場合、「新しい研究方法、実験方法、知識を得る事ができ自分の研究や学生指導に役立っている」。最後に留学してよかった事：「語学力、英語力が上がった、国内だけでは学べない多くのことを学べた、これまでの研究を見直すことができた、人脈が広がった、研究に集中できた」というご意見であった。

●シンポジストの体験談

赤塚朋子先生（宇都宮大学）：宇都宮大学勤務中に日本女子大学へ6月～1月に内地留学

内地留学の動機：今までの研究の見直し、これからどういう方向で研究するかなど、自分自身の時間を持つことと、学位取得準備という2つの理由。

留学先の決定方法：自分の研究課題をよく把握している先生に指導してもらえる母校を選んだ。

皆さんへの助言：行きたい気持ちがあったら、とにかく申し出ることが大事。

困ったこと・苦労したこと：困ったことは、法人化移行期もあって当初予定していた期間よりも短く、前・後期とも授業を全て集中でこなさなければならなくなった。苦労したことは、研究の綿密なスケジュールを立てておいたにもかかわらず、予定通りに行かなかったこと。

留学してよかったこと：新たに相談できる指導者を得る事ができたことと、自分の研究を見直せたこと。

上野先生（金城学院大学） ①大学院（国内）時代にカナダのブリティッシュコロンビア大学へ海外留学

②教職に就いた後、退職してカナダのアルバータ大学で博士取得の海外留学

留学時期：①は9ヶ月間（大学院2年時、9月から4月）修士論文は帰国後に執筆提出。②はその後、修士を終えた後に家庭科の教員になったが、教えていく中で出てきた問題点について、さらに研究するため退職し、博士課程に入学し学位をとるため留学した。両者合わせて3年8ヶ月。

各々の留学の相違点、共通点：①と②の相違点は、研究への問題意識の強弱で、①は大学院の修士論文テーマであったこと、②は教職中に生じた問題について、教職を辞して、さらには博士取得をかけて渡航したという違いがある。共通点はいずれも、周知な準備とリスクを覚悟していくこと。また、両方の留学とも奨学金や助成金を得ることができたのがよかった。旅費、生活費、学費など、貯金の準備も大事だが、これらにトライして得られたことは大きな経済的サポートになった。

留学希望者への助言：特に家庭科教育という分野については、一度社会に出ることが、自分の中で問題意識を大きくしていく経験につながると思われる。また、どのような形でもいいから、現地で教えるという立場から離れずTAをしたりしていたことが、帰国後すぐの再就職につながった。

香西先生（お茶の水女子大学） 48才のときカナダのブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）に文部科学省の在外研究員として留学

留学時期：2003年7月から2004年5月の10ヶ月間

留学先での研究や授業：日本での専門は調理科学だったが、実験装置の関係で留学先には化学研究室を選んだ。

留学中の前半は授業を聴講し、後半に実験に取り組みさせてもらったが、授業の聴講よりも実験のほうが手応えがあったように感じた。

困ったこと：英語のリスニング。分からない単語を少なくすることがリスニングを克服するポイントだと感じた。留学中はわからないのを我慢しないで、まずはたくさん聞くことを心掛けた。

留学してよかったこと：旅行でなく、そこで生活できたことと、大学および学外の人と話ができたこと。

●シンポジウム

Q.受入先の研究室の人たちとの人間関係は？（鈴木先生）

A.香西先生：共通語は英語だが研究室は多国籍だった。自分はリスニングが苦手だったので、ゆっくり話をするとまず仲良くなった。会話以前の相性も大事だと感じた。上野先生：同じ研究室の人たちとのつながりはなかった。交流もなかった。同じクラスをとったことで交流がスタートすることはあった。赤塚先生：ド

クターコースの部屋に机が確保されたので、院生からいろいろな情報を得ることができた。

Q.留学前の準備はいつから？（濱西先生）

A.香西先生：専任になったら一度は行くべきだといわれていた。英語がネックになっているようなら、なるべく早い時期から準備をするほうがよい。上野先生：1度目は2年くらい前から。学部生のときに、カナダの先生が日本に学会でいらしたので、そこで知り合いになり、興味をもったのがきっかけ。2度目は1～2年前くらい。赤塚先生：研究が行き詰ったときに。利用できる制度はなるべく利用していくべきだと思う。

Q.綿密な準備とは？（村上先生）

A.香西先生：準備といえるものは主に英語。英語の準備はやっておくにこしたことはない、やっていないと慣れるまで時間が余計かかる。英語ができれば同室の人とも仲良くなれる。上野先生：経済的なバックグラウンドを整備すること。奨学金の取得を継続させた。担当教官との相性をチェックすること。テーマだけでなく、相性もとても大事。語学に関しては学生時代 ESS に入っており、また TOEFL を何度も受験した。1回目の留学は、講義を最前列で聞くとともに、テープで録音して帰宅してノートを作り直した。赤塚先生：研究計画をしっかりと立てること。